理学部

自己宣伝・自己満足にならないために

理学部
自己点検・評価委員会
委員長
牟田泰三

誰でもやっている自己点検・評価

スキーを始めて間もない学生が、ある年、格段に上達した。聞くと、このごろは、スキーのうまい人を撮ったビデオが売られているそうで、自分のスキーフォームをビデオで撮ってもらって、このうまい人のビデオと見比べるのだそうである。ある程度スキーができるようになっていて、運動神経の発達した若者であれば、これで自分の欠点をすぐに見つけて、そこを重点的に直すように練習するから、上達が早いそうである。

私たちの若い頃は、ビデオはもちろんなかったけれど、八ミリカメラは結構普及していた。私も八ミリカメラを使って、自分のフォームを検討したりしたことを思い出す。ただ、八ミリの場合は、撮って直ぐに見られないという問題があって、現在のビデオほどの効果はなかった。それでも、見れば自分のどこが悪いのかは一目瞭然で、次のスキー行ではあそこを直してここを強化しようなどと考えたものであった。もう四半世紀以上も前の、オーストリースキー華やかなりし頃のことである。

自己点検・評価によって自らを改善するという行為は、誰でも無意識のうちに繰り返し行っているものである。人間の成長の過程は、他者および自分自身による点検・評価に基づいた自己改革の歴史だと言っても過言ではない。それにしても、正面切って「これぞ自己点検・評価である」という形で、しかも公に実行するのは、私にとっては今回が始めてである。いや、誰だってそうだったに違いない。理学部における自己点検・評価を始めたときは、だから、全く手探りの状態であった。

理学部自己点検・評価委員会の発足

理学部では、平成三年四月から、将来計画委員会において、自己点検・評価の議論が始められ、自己点検・評価を行うべき項目の素案が作られた。これに従って、「理学部における教育・研究の理念と目標」が組織・運営委員会で検討されることとなった。平成四年五月には、組織・運営委員会が廃止され、新たに「自己点検・評価委員会」が設置され、引き続き検討が進められ、同年六月に「広島大学理学部における教育・研究の理念・目標」がまとめられた。

同委員会で自己点検・評価の実施に取り掛かったのは、同年七月であった。いったん中間報告を取りまとめた後、続いて年度末に向けての実施作業に取り掛かった。今から思えば全く無謀なことをしたもんだと思われるが、そのとき、自己点検・評価項目を、丸ごと全て実施に移してしまった。将来構想、学部および大学院の教育・研究活動、学生の受け入れ、社会との関連、教官組織、事務組織、どの一つをとってもそれだけで一年はかかる問題ばかりである。それでも、悪戦苦闘するうちに何とか年度末までに作業が完了したのは、委員の皆さんと、忙しい中をご協力いただいた各学科・施設等の皆さんのお陰であり、事務の方々の献身的なご努力のお陰である。

自己点検・評価の原則

点検・評価の実施依頼を始めた頃に、「このくそ忙しいときに、自己点検・評価なんて、一体全体誰が考え出したんじゃ。いいかげんにしてくれえや。」という声も聞こえてきたりした。なるほど、それもわからぬではない。こんな煩わしいことを営々とやるくらいなら、教育・研究に没頭したほうがずっと有効ではないかともいえる。尤もなことである。

こうならないためには、自己点検・評価を進める上での原則というものをおいたほうがいいようだ。先ず、何のために、誰のために自己点検・評価をやるのかということについて、共通の認識を打ち立て、誰もが十分納得して作業を進められるようにすること。また、効率的に点検・評価を実施し、手間暇をかけすぎないようにすること。教育・研究の妨げになるようでは本末転倒であろう。

優れた自己点検・評価を行うことは勿論重要であるが、それだけで終わってしまっては「自己宣伝・自己満足」にすぎない。それが改善につながってこそ意義がある。自己点検・評価の結果が、広島大学の今後の改革にいかに生かされてゆくか、ということが明確に示される必要があろう。